

## 無名草子

### 文

この世の中に、どうしてこのようなことがあったのだらうかと、すばらしく思われることは、手紙でございませよ。『枕草子』に、繰り返し繰り返し申しているようですので、今さら改めて申し上げるに及ばないけれども、やはりたいそうすばらしいものである。遠い所に離れていて、何年も会うことのない人であっても、手紙というものさえ見れば、目の前で差し向かいでいる気持ちがして、かえって、（実際に）向かい合っているとは思うほども言葉が続けられない心のありようをも表現し、言いたいことをもこまごまと書き尽くしてある手紙を見る気持ちは、めったにないほどすばらしく、うれしくて、直接互いに向かい合っている場合に劣っているようか、いや、劣ってなどいない。

これといつてすることもなく手持ちぶさたでいる時、昔つき合いのあった人の手紙を見つけたのは、ただもうその当時の気持ちをして、たいそううれしく思われる。まして、すでに亡くなった人などの書いたものなどを見るのは、たいそうしみじみと感慨深く、年月が多く積み重なっているのに、たった今筆を（墨で）濡らして書いたようなのが、本当にすばらしい。何事も、ただ顔を合わせている間の情感だけでございませよ、この手紙というものは、まったく昔のまま、少しも変わることがないのも、たいそうすばらしいことである。

すばらしかった延喜・天曆の御代の昔の事柄も、中国・インドの知らない世界のことでも、この文字というものがなかったならば、今の世の私たちのほんの一端も、どうして書き伝えることができようか、いや、とてもできはしないなどと思うにつけても、やはり、これほどすばらしいことは決してございませよ。